

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	吾人が最初の義務：論説
Author(s)	安住，時太郎
Citation	龍南會雜誌， 1 1： 1 5 - 2 0
Issue date	1892-11-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/3934
Right	

の事業は、自黨の維持にあつて邦家の獨立をあらさず。以是割據分立互に相嫉視し、互に相箝制して、遂に相卒て國を清に賣り、民を露に賣り、中原の釜鼎は奪はれ、御府の形弓は折られ、大祖箕子をして再び地下に麥秀黍離の悲歌を歌としめんとす。咄秦檜は君子なり。吾人又云ふに忍びず。乞ふ瞑目次章に移らしめよ。

吾人が最初の義務

安住時太郎

余は何時しかより久しく一説を抱けり。謂らく、凡そ吾人が一たび生を天地の間に禀けたる以上は、其貴たり賤たり、上より下たり、書生たり百姓たり、政治家たり代言人たり、農工商業家たり理學哲學家たるを問はず、誰しも必ず自ら奮ふて其の身を完全なる善人と爲し、而して己が能ふべき最少量の力を盡して、己が力の達し得べき最多數の人を爲めに、善く爲まほしけれ。否、爲さざる可らず。換言すれば、人は己の全力を奮ふて最多數の人の爲め、最大幸福を進捗せんことを以て畢生の務とすべきなりと。余が此説を信するや、決して理論若くは實際より推究したるに非ず。又其根底を深奥なる哲學の如き者に有するにも非ず。唯吾人が公平無我の眼を以て世態人情を観察したる後、瞑目して之を心中に排列せば、自然に油然として吾人の良心に浮び出づる所の斷定なり。然るに或一人の能ふべき力の量と、其達し得べき人の數は、人の各其面を同ふせざるが如く、千人千種万人萬別なりとす。例へば三軒町の片隅の賤が屋に起臥する一匹夫の

能ふべき力の量は、一家の平和を維持し、或は妻子を勵まして職務に勉強せしめ、節儉以て浪費を省き、或は近隣と有無相通じて相互の用を利する等に止まると、而して其達し得べき人の數は、是等妻子眷族若くは二三隣家の人に止まるが如く、彼一匹夫の力量人數の範圍は甚だ狭きものなり。又例へば廟堂の上に立ち天下の政機を掌握する大臣宰相若くは政事家等の力の量は、満天と億萬生靈の幸福を進捗する程に大量として、而して其力の達し得べき人の數は、亦取りも直さず満天下人民の數なり。是の如く、下は一匹夫の賤き（人爵より云へば）より上と大臣宰相の貴き（天爵は知らず）に至るまで、其間幾十百の異なる職務に従事せる幾千萬の各個の人々は、皆各々其力量と人數を異にせること辨を要せずして明ならん。而して前述の論より推究すれば、人間の品位或は事業の度は實に力量を以て濶とし、人數を長さとして作りたる直方形の面積より由て比較するを得べき。蓋し力量なるものは常に積極的なるを要す、而して消極的なる可らず。苟も然らずんば、如何程長しとするも「マイナス」の力量と「プラス」の人數（人數は常に「プラス」なり）とを以て何の直方形をう作り得ん。常に幸福進歩的なるを要す、而して幸福妨害的なる可らず。苟も然らずんば、是人の社會に影響を及ぼす力量如何程大なりとまると、畢竟社會の大害物たるに外ならざるなり、且つ夫を人の數は已を加へて必ず二人以上ならざる可らず。然らずして若し已れ一身なるときと。人數一を以て力量に乗ず、力量如何程大なりとも其乘積は力量其自身れみ。亦遂に社會の幸福は爲に直方形を作ること能はざるなり。是に知る、社會人衆の幸福

を目的とする積極的の力量となるに非ずんば、人假令ひ王莽の才、安石の智、秦檜の略を有すと雖ども、其人や社會の一個の腐蝕蟲のミ。之を目えて萬物の靈長たる人間と稱するに足らざるなり。又知る、已一人を満足せしむるのみにして善、人に及ばすことなくんば、才隨務光及びあらゆる隱者仙客の如き、如何程積極的の力量を有するも、其ハや深山の奇木海底の眞珠と一般のみ。亦未だ目して人間の義務を盡せるものとなす可らざるなり。是に由て之を觀れば、人間一生の實務は其れ彼の力量を増善するにあるか、彼の人數を増加するにあるか、彼の直方形の面積を、力を盡し智を竭くして及ぶ丈廣大無邊に開拓するにあるかな。顧みて各個人の力量と人數の増進する有様を察するに、間には人爲にあらざる天然の幸不幸遇不遇の爲めに、或は順風に帆揚げて高貴に立身し、或は逆浪に揖折れて劣等社會に沈淪するものなきにあらざと雖ども、大抵専ら各人が智識上道德上奮發勉勵の多少に關するものなり。何んとなれば人間の能力の量を増大するに必要にして且十分なる條件と、唯智識の修得と道德の素養との二事にあてて、而して此修得し素養し得たる潛勢力を動勢力に變じて活世界の事務に活用するは、是即ち達し得べき人の數を増加する所以なり。此二者成るありて然る後人間の能事畢んぬ矣然る後人間の義務完全に盡されて復餘蘊なしと謂つべし。

大凡人生の事務は之を別てば二となるが如し。一に曰く修養。二に曰く活用。然り而して修養遂げたりとて活用必ずしも靈變なる能はず。活用靈變なりとて其初め修養の必ずしも完きが爲に

あらざるに似たり。是に於てか世上二種の人物と生ず、所謂理論家及實際家はなり。然らば則ち活用の能否は人の天性に出で、而して修養は遂に豫めするに足らざるか。是疑問は大に人をして五里霧中に彷徨するが如き感をなさしむ。或は活用の妙變は勉むるに由て得べきにあらずと信じ、遂に修養の學を變じて單に娛樂の學となし、而して畢生の心力を盡して學問其物の爲に勉強し、其終りや學問と討死して非常の勞力も全く水泡に歸さず生産的に消滅するものあり。或は自ら社會の實學を達せりと氣取り、修養を以て心頭に懸くるに足らずとあし、終に言々蕩々として社會の俗人「穀つぶし」を以て老まらるものあり。此兩種の人皆過て、抑も活用の妙變は修養の熟せるに非んば得べからず、修養も亦之を活用して始めて其完美を得るぞか。夫を修養誠に得ば活用謂はずして可なり。活用眞に成れば修養亦論せずして可なり。換言せば修養活用其一致なり。之を名けて知行合一の論と云ふ。一例を擧て之を證せんか、吾人が毎日瑞邦館に於て見る所の柔道に就て云はんに、吾人は屢々之を耳にす。曰く某々は善く技を知れり。然れども巧未だ至らず。曰く某々は善く技は巧みなり。然れども理未だ通せず。彼技に巧みなるもの豈其技の理を知らずして善く技に巧みならんや。彼技を知るもの豈其技を用ゆることなくして善く技を知るを爲さんや。若し然りとせば未だ一回だも汗衣を着し場に上り四肢を投することなきもの、師範より諸種の技に關したる話説を聽きたまはとて、直に之を稱して善く技を知れりと爲さべさか。後進者一日二日の登場を以て、是技は斯くせよ、彼技は斯くありと教へられ、其れが如く爲

し彼を如くするもの、之を稱して善く技に巧みなりと云ふを得べきか。故を以て眞に技を知るものは必ず技に巧みあり。而して技に巧みなるものは必ず技を知れり。(是知行合一論は他日再たび詳論することあるべし)。かるがゆへに、修養よして若し完全なりせば決して活用の巧みならざるを憂るに足らず。而して活用亦遂に修養を離るゝこと能はざるなり。

論じ去り論じ來りて端なく吾人は「吾人が最初の義務」の何たるを明にするの機を得たり。何ぞや。他なし、唯潜勢力を蘊蓄するにあり。詳言せば、先づ十分の智識を修得し、完全の道德を素養するにあらず。何んとなれば、斯くしてこそ初めて活用妙變なるを得べければなり。修養既に得、活用茲に妙變ならんか、彼の直方形の面積は無限に大にするを得べし。人間の義務是に於てう完くるを得べし。斯く云はゞ人皆必ず冷笑すると共に冷言せん。子が謂ふ所と三尺の童子も常に口にせる所。然るを何ぞ仰々々くも吾人最初の義務などの表題を掲げ、讀者をして貴重之光陰を費さしめしぞと。嗚呼世人が常に口にする所。是誠に吾人が敢て故らに言を爲す所以なり。試みに問ふ、世人が常に之を口にし、且熱心學を勉むるは其目的果えて何くにあるや。吾人は恐る、多數の人が先づ「名の爲め」「身の爲め」なる答を其胸裡よなして、然る後「國の爲め」なる答を口に發せんことを。是れ吾人が故らに彼直方形に濶の量を増大するを目的とて、世人の口癖なる智識は修得、道德の素養の必要を論ぜし所以なり。

再び以上の所述を略言せば、吾人在世間の務は能力の量と、達し得べき人數とを以て、及ぶ丈け

大なる直方形を作るにあり、此直方形の積は力の量と人の數を増すことに由て無限に大にすることを得べし、而て力量を増せば人數も亦從て増加す、故に吾人最初の義務は力量を増して潛勢力を儲蓄するにあり、十分なる智識の修得と完全なる道德の素養とは力量を増すに必要にして且十分なる條件なり、

然るに、今日智識の修得は吾人總て其必要を銘心し、且爲しつゝあり(仮令へ目的と異なるにせよ)。いざや吾人は他日を待て徐るゝ道德の素養に就て研究することあらん。

雜 錄

人吉町 記事

嚮ニ我校修學旅行チ鹿兒嶋ニ行フヤ歸途球磨郡人吉町ニ泊ス因テ郡長中山氏ヲ其寓居ニ訪フ坐ニ郡吏菊池某等アリ因テ之ニ問フニ該郡ノ地理及ヒ歴史ヲ以テス某等我輩ノ爲メニ説ク所大略左ノ如シ

地 理

人吉町ハ球磨郡ニアリ球磨郡ノ地タル環ラスニ山嶽ヲ以テシ他ノ郡國ニ至ル必ズ山路

ヲ經過セザルヲ得ズ唯球磨川ノ船便アリ沿岸ノ町村トノ交通稍便ナリ球磨川ハ人吉町ノ中央ヲ横流シ山間ヲ迂回シテ八代ノ灣ニ注ギテ海ニ入ル其流域人吉ヨリ八代ニ至ル十六里許ニシテ船ニテ下ルトキハ四時間乃至八時間ニシテ八代ニ着スルヲ得ル然レ之ヲ遡ルトキハ則其間數日ヲ